

書 評

森 隆男著

『住居空間の祭祀と儀礼』

宮内 貴久\*

民俗学において、屋内神や屋外神の祭祀、位牌祭祀や盆行事などの屋内における祖先祭祀の問題などは、主要な研究領域であり、多くの研究の蓄積がある。言うまでもないが、こうした祭祀は、住居内の祭祀施設などで行われるわけである。だが、祭祀という精神文化と、仏壇や神棚などの祭祀施設という物質文化とを結びつけて議論されることは、意外に少なかったのではなからうか。おもに前者は民俗宗教研究の領域として、後者は民家研究の領域として研究が進められていったように、評者には思われる。両者を意識した従来の研究としては、数は少ないが、住居内の空間構成に関する論考がいくつかある程度である。本書は、さらに、一步踏み込んで、祭祀と儀礼から住居を考察しようとする、意欲的な論文集である。

さて、「歩く・見る・聞く」という言葉は、民俗学が伝承資料を得る方法を端的に示している。そこで得られる伝承資料は、あくまでも聞いた時点における、話者と調査者との間の「会話」の所産とも言える。こうした伝承資料に対する資料批判の必要性、あるいは「伝承論」として、口承文芸研究、民俗芸能研究の領域から、近年、議論が活発化している。さて、民家研究は、現在の「伝承論」という議論とは直接結びついていない。しかしながら、建築史学による編年・復元という方法の確立により、眼前の民家がたどってきた「歴史」が明らかにされた。すなわち、民俗学者が「見る」「聞く」民家は、現存のものであるのに対して、建築史学者は、その「過去」をも「見る」ことにより、眼前の民家の変遷を明らかにし

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

た。言い換えれば、伝承資料の限界が明らかにされたのである。

その結果、民俗学の言説と、建築学の言説との間にずれが出てくることとなった。例をあげると、間取の変遷をめぐる議論、あるいは、近年では、建築史学者の大河直躬氏による、仏壇の成立をめぐる批判などである。大河氏は、その著書『住居空間の人類学』において、仏壇の起源に関する民俗学の言説を、建築学的遺構からは理解できないと批判した。それに対して、本書の第一章第三節では、大河批判を受けて、盆行事における精霊棚などの事例を絡めた議論、あるいは第一章第二節で、神棚の機能についての考察が展開されている。

本書では、こうした伝承資料の限界をふまえた上で、伝承資料はもちろんのこと、可能な限りの文献史料、そして建築学的資料を駆使することにより、歴史的アプローチを行っている点が特徴的である。また、民家研究と民俗宗教研究とを結びつけることにより、祭祀・儀礼を通して、「住居」というモノを考察する点も、興味深い。

著者は、住居を捉えるうえで、「祭祀」と「接客」の二つの視点を重視している。祭祀に注目する理由として、「住居空間に対する人々の意識が直接に反映された結果であり、住居の本質と密接に関連していると思われるからである。」とある。「接客」については、「住居を時間の流れの中に位置づけることができ、現代の住居に関わる課題に結びつけることがより容易になると思われるから」とあり、具体的には、正式の客と来訪神を想定している。

本書の構成は、以下の通りである。

第一章 住居と神々

第一節 火と儀礼

第二節 神棚の機能

第三節 仏壇の登場

第四節 神祀りの深層にあるもの

第二章 住居空間の開閉と接客

第一節 神祀りと接客空間

- 第二節 渡辺綱伝説からみた住居
- 第三節 住居の開閉と縁
- 第四節 接客の象徴
- 第三章 漁村の住居・山村の住居
  - 第一節 漁村須賀利の集落と住居
  - 第二節 山村十津川村の住居
  - 第三節 山村秋山郷の住居とすまい習俗
- 第四章 家および講を単位に展開する神
  - 稲荷神の検討を通じて —
  - 第一節 屋敷神祭祀の背景
  - 第二節 屋敷神から地域の神へ
  - 第三節 稲荷講の展開
- 第五章 家と氏神祭祀
  - 第一節 家と村の祭祀の接点
  - 第二節 宮座儀礼
  - 第三節 宮座縁起の成立と家
    - 奈良大安寺八幡神社の場合
  - 第四節 稲荷祭と東寺中門神事

第一章から、第三章までは、住居そのものを、祭祀、伝説、接客などの視点から、議論が展開され、「カクレガ」としての住居という住居観が提示されている。「カクレガ」という言葉は建築学者の上田篤氏によるものである。

著者は、この「カクレガ」という機能が住居の持つ本質的機能であるとする。各種の祭祀においては、住居外部からの負の要因を避ける、あるいは、住居内部で生成された負を排除し、安全な空間を保持することが、本質的な機能であるとする。したがって、住居の内部と外部を隔てる「境界」領域、住居の開閉や縁に注目している。この視点は興味深い。ただ、それぞれの空間を隔てている建具の違い、あるいは段を設けるなどの、室内意匠について、もう少し論じて欲しいところである。また、おもに祭祀に関心が集中しているためであろうか、日常的な接客、部屋の使用法、非日常における部屋の使用法、室内意匠などについても論じて欲しかった。

評者は、石川県輪島市で、一集落の民家の悉皆調査を共同で行ったことがある。その調

査では、一集落の民家の悉皆調査により、間取の変遷が、ある程度把握することができる。接客空間、特に仏間の拡大傾向が見られること。仏壇や床の間といった室内設備は、現存の家屋では、下屋部分となっている家がほとんどで、建築当初と現存家屋とでは、かなり様態が異なっており、現存の間取り、室内設備などから、過去の祭祀形態を類推することの資料的な難しさなどを痛感させられた。本書の第一章～第三章で展開される議論、特に第三章では、こうした一地域における民家調査、民俗誌的資料と記述があれば、より説得力のある議論となったであろう。

第四章、第五章では、屋敷神祭祀、宮座の問題など、住居そのものから離れて論が進められる。第一章から第三章までは、「接客」「カクレガ」という著者の論旨が見られるものの、後半部分では、そうした論旨が弱いと感じられる。しいて言えば、第五章第一節の祭祀の場についての考察が、「接客」に通じている。内容的にも前半部分と比べて、違和感を感じる。『住居空間の祭祀と儀礼』というタイトルからも、これらの章は、果たして必要だったのかと疑問を感じた。

最近、民俗学からの民家研究は、低調である。本書は、民俗学からの久しぶりの住居論、民家論として評価できる。また、伝承資料とともに、文献史料と建築学的資料を援用することにより、従来の民俗学の言説の再考、屋内祭祀を捉え直す可能性を提示したことは、大きな成果であろう。本書を読んでいて、民俗学における民家研究の目的、方法論など、あらためて考えさせられた。民家研究者だけでなく、民俗宗教研究者にも、一読して欲しい書籍である。

(1996年2月刊 岩田書院 A5版 385頁)